

【2014年6月22日 ソーシャルワーク学会企画シンポジウム】

ソーシャルワークマインドとソーシャルワーカー像再考

シンポジスト：鶴田啓洋（特定非営利活動法人やどかりサポート鹿児島）

前山健一（愛知県半田市社会福祉協議会）

保正友子（立正大学）

空閑浩人（同志社大学）

コーディネーター：高橋信行（鹿児島国際大学）

大島巖（日本社会事業大学）

高橋：学会企画シンポジウムを担当しています高橋と申します。シンポジウムの狙い等について、昨日からの基調講演、シンポジウムをお聴きになってソーシャルワークマインドを頭の中に描かれている方もおられると思います。企画をした段階で大会校シンポジウムとの連動性をそれほど意識したわけではなかったのですが、企画を進めていくうちに連動性を感じておりました。昨日のお話を聞いて、またその気持ちを強くしたところです。大会案内でこのシンポジウムの企画の意図を解説しております。社会福祉専門職資格の制度化、他職種連携の充実など機関の機能としてのソーシャルワークが求められる。逆にワーカーの社会的使命や対象認識に立つソーシャルワークマインドの必要性を感じています。マインドはリアルな現場実践を通して、悩み、葛藤しながら練り上げられてソーシャルワーカーのキャリアをつくりあげていきます。ここでは単なる技術的側面ではなく、価値や生き方としてのソーシャルワークを実践者と研究者のあるべきソーシャルワークの再構築をするということ。第一回のご案内時に書いた文章です。ソーシャルワーク学会の中で、何度かソーシャルワークそのものを対象とするシンポジウムが開かれています。近々では第27回大会でも「ソーシャルワークとしてのアイデンティティ」をテーマに議論が進められました。その中では、たとえば湯浅誠氏や清水康之氏の活動等に対して、「彼らはソーシャルワーカーか？」という

議論が展開されたことがあります。それがよかったのかどうかというところではありますが、本来、ソーシャルワーカーがやらないといけないことを、そうしたキャリアをもっていない、さまざまな実践家が押し進めている現実がある。そこでソーシャルワーカーは社会的問題に対して必ずしも能動的に活動していなかったのではないかとという自己批判的な視点も提起されておりました。また特養の生活相談員のような職種、本来はソーシャルワークを学んだものがそこに配置されることが考えられるわけですが、実際には介護業務からそのまま相談員になるケースが多い。必ずしもソーシャルワークを学んでいないものでもソーシャルワーク業務をしている、そうしたアイデンティティを危ぶむ声が上がっていました。その中でもう一つ学問体系としてソーシャルワークを学問的な問題としてのアイデンティティの議論をしたところがあり、論点が複雑に絡み合ったところもあるかなと思います。社会福祉士養成の中でチームワークアプローチが強調され、近接領域に対して自分は何者であるかということを表示しなければならないということもあり、機能の独自性を示さなければならない、そういう点において大きな問題がまだ残っている。社会福祉相談援助という機能に限定して定義づけるとしても、たとえば社会正義や社会変革を求めるソーシャルワーカー像があるということも議論の対象になったかと思えます。このテーマに関しては前理事の平塚先生と

ともに練り上げていって、私などの思いとしてはソーシャルワーク教育の視点から養成教育の中で国家資格に合格することが主目的になり、制度の適用者としてのソーシャルワーカー像がだんだん強くなってきていると感じます。学生にとっては就職の有利さでいうと、ワープロ検定で資格をとるのと同じような感覚で社会福祉士の資格をとっていく学生もだんだん増えてきたように思います。そうしたカリキュラムの中で「余はいかにソーシャルワーカーになりしか」という技能の語りやソーシャルワーカーから引き出したいという気持ちも出てくる。ソーシャルワーカーの人たちが大学の中で語りをする時、自分自身の自らの機関に限定した話をすることもありました。「ソーシャルワーカーはずいぶん転職をするんですね」「今まで英語を学ぶ、数学を学ぶこととちょっと違いますね」と新入生たちはいいます。ある種の驚きでもあるわけですが、社会福祉を学ぶ、ソーシャルワークを学ぶということは自分自身の生き方に直接かかわってくるぞと感じてきているのだろうなと思いました。

単なる機関の機能としてではなく、それらを越えたソーシャルワーク像であるとか、それを支えているソーシャルワークマインドに対して、今までも研究者サイドで議論されたことはありますが、現場サイドとの相互作用を通して、岡本先生から融合化と触媒をどうするかという話がありましたが、そういう議論を展開することで、ある種のアウトプットを見つけていく活動をしたいということでシンポジウムを企画したところがあります。これまでもこうした議論は続けてきましたが、今後も議論を進めながら社会が変化していく状況もありますので、本学会でも議論を進めていく必要があるのではないかと考えています。

本日はシンポジストとして空閑先生が『ソーシャルワーカー論』を書かれたということでお願いし、また保正先生も医療ソーシャルワーカーの成長の道のりということで、キャリアの問題等について詳しいということでお願いしました。ただ今回は直接、現場サイドの現場から声をあげるだけでなく、現場を通して新しい論点を提示した

いということもあり、鶴田先生をお招きしました。鶴田さんは鹿児島島の湯浅誠氏のような方でソーシャルワークをベースにしているというところが特徴です。前山先生はソーシャルワークという視点からソーシャルワークマインドについてお話をさせていただく。コーディネーターは大島先生に全体のとりまとめを含めてご議論を進めていただきたいと思います。私からの意図はこのあたりにして大島先生にマイクをお渡しします。

大島：日本社会事業大学の大会でございます。ソーシャルワーク学会の大会イベント関係を担当する研究第二部会の理事を務めています。この企画は高橋先生と平塚先生が企画されましたが、お役目上、コーディネーターと進行を務めさせていただきます。このシンポジウムは全体テーマが「日本のソーシャルワーク実践理論の本質を探る——専門職（プロフェッション）としてのソーシャルワーク再考——」というタイトルがついています。企画的には野口先生、田中先生に全体の企画を考えて頂きました。昨日の基調講演、シンポジウムの中でも今日のことが触れられ、全体が融合的に一つのテーマが検討できるように構造的になっているかと思えます。昨日の議論を踏まえながら今日の議論ができればと思っています。

昨日夕方、シンポジストのみなさん方と打ち合わせをしました。改めて今日のプログラムを整理させていただきました。順番を空閑先生から始まってということでしたが、少し組み換えさせていただき、最初に実践現場で活躍しておられるお二人の話をうかがいます。そのお話を踏まえつつ、保正先生、空閑先生に研究者の立場からご発題いただくことにしたいと考えています。

実践現場のお二人にお話を伺いまして、ある面では壮絶な内在的なコンフリクト、壁を体験され、それを乗り越えて大活躍されている方だと思います。その経過などについても触れていただき、掘り下げていただくことをお願いしました。その中で生き方としてのソーシャルワーカー像、それが浮き彫りになってくるのではないかと期待しています。素晴らしいご活躍をされているわけですが、コンフリクト・壁を乗り越えられたご自

身のソーシャルワーカーマインドについて触れていただければと思っています。

生き方としてのソーシャルワーカー像、自分史の中でソーシャルワーカーとしてどう発展してきたのかということ踏まえて保正先生には研究テーマの中でソーシャルワーカーの「成長」がキーワードになるということです。質的研究をなさって、ベテランのソーシャルワーカー、主任のワーカーの発展プロセスをたどる仕事を精力的になさっている。その中で壁を乗り越えていくマインドについて先生のご研究の中で整理されている仕事をご紹介いただき、壁を乗り越えていくマインドのマッピングを提示していただければと思います。

空閑先生もソーシャルワーカー論について中心的に仕事をされています。教育サイド、力量のあるワーカーを育てていく中で、教育がどういう役割を果たしているのか、継続教育で造詣の深い仕事をされているわけですが、そういうワーカーが育てていくプロセスの初期教育はどういう形でなされているか、教育の力を取り上げることができればと思っています。そういうことを含めてマインド、価値、ソーシャルワーカー像をどのようにみなさん方、学生たち、社会に対して伝達していくことができるか。昨日のシンポジウムでも議論されましたが、シンポジストの報告をうかがった上で、全体で議論できればと思っています。よろしくをお願いします。

それでは最初に鶴田啓洋さん、よろしくをお願いします。

今こそソーシャルワークを

—誰もが安心して暮らすことのできる地域を目指して—

鶴田：鹿児島からまいりました鶴田と申します。本日はこのような学会にお呼びいただきまして大変光栄です。ご紹介で活躍していると話をいただきましたが、私としては活躍しているとは全く思っておりませんで、未だにもがき苦しんでいる、19年たちますが、未だに不安定で悩んで揺れ

ている現状がございます。今日、ソーシャルワーカーの実践理論の本質を探る中でマインドという言葉をいただきました。私のこれまでの実践をご紹介する中で私自身、その本質に迫ることができれば何よりの勉強かなと、私の19年間のもがき苦しんでいる、現在ももがき苦しんでいる現状を恥ずかしながらみなさまのお伝えすることしかできませんが、どうかよろしく願いいたします。

「今こそソーシャルワークを」とタイトルにしました。なぜソーシャルワークをというタイトルをつけて話をするかということに悩んでいるところがありまして、いろんな分野の方々と出会いする中で、自分の専門性がぼやけてしまっていくというか、このままでいいのだろうかという迷いがありつつ、最終的に私たちが学んできたソーシャルワークを専門的に生かすことが、この社会にとって重要なんだということを思いつつ、でも実際にはそれがなかなか実行できない。だからこそ今、ソーシャルワークをということで私なりに忸怩たる思いでこのタイトルをつけております。「特定非営利法人やどかりサポート鹿児島」、もう一つ「ホームレス生活者を支えあう会」。この二つのNPOについてお話したいのですが、今から8年前に医療機関を飛び出してつくって、そしてともに活動しているNPOで、まさにもがきの原点になっている場所です。そういうところでお話を進めさせていただきます。

4つの柱。1つは精神科病院長期入院者との出会い。2つ目はNPOでの体験、3つ目が24時間365日実施している電話相談事業、ここで起こっていること、行われていることから発生した私のソーシャルワークに対する迷いということをお話し、本当に考えないといけないことは何なのかという、私の思うところを4番目に述べさせていただきます。

一番目の長期入院者との出会い。福祉系の大学を卒業した後、1年間は医療ソーシャルワーカーとして一般病院に勤務しておりました。その当時、今から20年前は鹿児島においては医療ソーシャルワーカーを配置している病院はあまりない時代で、先見の明のある病院理事長がとりあえ

ず、格好だけはMSWを入れようと、そこに就職したのですが、何もすることがない、看護師さんも事務長さんもソーシャルワーカーの使い方がわからないということで1年間を過ごしました。私なりに最初のもがきがそこだったんですが、我慢が続かずに先輩方から聞くソーシャルワークの価値と本質が語られるたびに現場で何もやっていない私は、もどかしさを感じまして1年で挫折してしまいました。その時に声をかけていただいたPSW、精神科ソーシャルワーカーの方に引っ張られて初めて精神科の病院に足を踏み入れました。そこが第二の転換期で私にとっては大きなソーシャルワークの位置を占めているのですが、約12年間ほどここで働くことができました。精神科病院については、いまだに精神保健福祉士という国家資格があるにもかかわらず、実態はさほど改善されていない。何十年という長期入院の方々を少しでも地域移行するために精神保健福祉士はあつたはずなんです。知る限りでは鹿児島県においてはまだまだ進んでいない。鹿児島は全国でも有数の日本一の精神科病床を抱えています。平均在院日数も500日を超えているのではないかとというくらい長期入院を強いられている方々が未だにたくさんおられます。世界的にみてもこれほど病床数が多く在院日数を抱えている国は先進国ではない。その鹿児島で精神科ソーシャルワーカーになってまず出会ったのは長期入院者の方々でした。退院支援を1年目に任されて、いろんな患者さんと出会う中で30年間入院されたある女性の患者さんを訪れ、退院について話を始めるのですが、その彼女からいわれた言葉が今でも胸に刺さります。「私はここにいます。外、家族や地域は怖いんです。鶴田さん、余計なことをしにこないでください」。そういわれたことが今でもはっきり耳に残っています。「どうせね、私らこんなところにいる自分たち、精神科にいる人間はまともな人間にみられない、だから余計なことはしないでよ」というような、まさにすごい状況、すさまじい状況の現場がありました。そこでまず長期入院者の方々をどんどん地域に出そうという決意をしました。「もうここにこないで、私の面倒をみない

で」といわれた彼女に1年間つきあひまして、嫌われながら怒鳴られながらおつきあひした結果、半年くらいたった後に「あなたうるさいから、とりあえず見学をしてみるわ」といって外にあるデイケア、住居とか、ちょっと騙されていってくださったんですね。そして1年後、彼女は見事に退院をするまで決意をしてくださりました。すばらしい決断だったと思います。そして彼女はいよいよ地域生活を送り始めたんですが、1年たって彼女に「どうですか、病院のことを思い出して」とお尋ねしましたら「あの時はあんなふうにあったけども、もう絶対病院には戻りたくない」。あの1年目の体験が私にとっては一番大きい。その時のかわりだけで自己決定を判断するのではない、あたりまえの生活をどう支えるかというところをここで感じました。当時、北海道の浦川のべてるの家、今は有名になっていますが、この頃に1週間ほど研修にいかせていただいたことがありまして、そのことも印象に残っています。患者さんと一緒に合宿して語り合ったあの日のことを考えた時に「早く鹿児島でもこのべてるのような堂々と生きる姿を实践したい」と思いながら心に決めた最初の年でした。

「地域で暮らす」を支援したけれども、多くの社会的障壁にぶつかったと思います。長期入院者と12年、精神科病院で働く中で、どんどん地域に出す取り組みを毎年、毎月始める中で、いろんな障壁にぶつかりました。家族関係が悪化しているところで退院、退所時に引き取れない、引き受けられない家族もいっぱいいました。ご高齢になられて、もう家族がいない方も相当おられました。地域移行する際に最初にしないといけないことは住まいの確保です。当然、病院とか法人でグループホームや施設はあるんですけど、そういうところも含めて、ただそこだけではない地域という意味でアパートを探して地域の方々に溶け込めるように病院の周りにある不動産屋を20軒ほど回って半分くらいは断られたんですが、それでもたくさんいってようやく不動産屋と仲良くなってアパートの確保をすることができたんですが、そこでま

た大きな問題が立ちはだかりまして、保証人の問題、今、都会では家賃保証会社とかで対応できるかもしれませんが、地方都市である鹿児島では家賃保証、連帯保証人がいないと貸してくれない現実がまだまだあります。これで病院を退院する多くの方がつまずいたんです。退院する時に家族がない、連帯保証人がいないことで退院できないという。我々はこの人に地域生活をもう一度きちっと味わってもらいたいと応援しているのに連帯保証の問題という壁にぶつかった。やって10年目くらいです。そこで私がやったことは、恥ずかしいというか、情けない話ですが、若気の至りで10人くらい保証人になりまくっちゃったんです。自分で、個人で、何の許可もなく、今考えると恐ろしいことをしたと思うんですが、これで患者さんが退院できるならええやということで、エイヤッとどんどん保証人になって退院させていったというのが前半です。自分なりにそれで自己満足に陥って「俺はいいことやったぞ」と、大きなしっぺ返しが平成18年くらいに訪れます。何かというと退院した患者さんが家賃の滞納を起こしてしまって、なんと数十万円近い保証をふっかけられたという、今でも僕の中では強烈に大きな出来事なんです。そのことがあって、ただ単に想いだけでやってはいけない。何かまずいことをしてしまったなという、ここで2番目の壁にぶつかります。

そして当時、一緒に法律的なことで相談にのっていたホームレス支援をやっていた司法書士の先生と会うことができ、その時に「なんで保証人になんかなったの？」という話になり、「実は先生、保証人がいないと地域に出られない、この問題をどうにかしないといけないと思っているんだ」と熱心に話したら、司法書士の方が「全く同感だ、僕はホームレス支援をやっているけど、彼らもまたアパートを借りようとする時、連帯保証人がなくて困っているんだよね。立場は違うけど全く同じことで困っている、どうする？」という話になって「じゃあ、つくろうか、先生、つくりましょうか」という話になりました。これが「やどかりサポート」です。平成19年8月に立

ち上げた連帯保証をするNPOです。湯浅さんがこれよりまだ3年前に東京で「もやい」という、同じような連帯保証の仕組みをやっていたのを知っていて、立ち上げる前に、ここも1週間くらい合宿して見学させていただいて、鹿児島に持ち返って連帯保証になる仕組みをつくりました。相談数が200名を超えていて、精神科の病院、知的障害がある方、長期の施設入所の方、ホームレス状態の方の地域移行を含めて150名近い方々の保証をしています。ただすごいことをやっちゃったなと今、思うんですが、今、やれといわれたら絶対しない。30代半ばで何も知らなかったのでエイヤツでやっちゃった、必要だからやっちゃったという感じですが、とてつもなく大きなことをやって、保証事故が起ると保証しないといけないということで、この制度のあり方について困難に直面しています。毎年100万近い保証事故をNPOでやらないといけないので、次にやらないといけないこととして今、連帯保証事業をやっているNPOと共同してこういう問題を大事だから国で何とかできないかと政策に訴える取り組みをしようと感じています。私にとっては大きな出来事で、お金をかぶったことも、ただ熱意だけではだめだったんだなということを改めて感じています。

社会問題ということでホームレス状態にある方やDV被害の方、生活困窮者への支援、連帯保証の取り組みとは別にホームレス支援も同時期に始めました。鹿児島という土地は地方でホームレスなんかいないんじゃないと思われがちですが、実は関東や関西、都会からたくさんの方が流れてこられます。最後に桜島を見たかった、あったかいところだとか、鹿児島ってその先は海なので「もうどこにもこの先いけないから鹿児島にきました」という方が結構おられます。そういう方々を何年も、ボランティアで炊き出しをずっとやっていて、鹿児島では週3回炊き出しをやっています。そういう方々がどこに相談していいかわからない、相談にいったら、たらい回しをされたということがわかった時に、またソーシャルワークはどこにあるんだろうかというジレンマと迷いを感じ

ることになります。実践をやっていると思うんですが、路上におられる方の2, 3割、軽度の知的障害のある方、発達障害のある方とか、そもそも生育歴や家庭環境の中で困難を抱えて生きてこられた方、生きづらさを抱えている方が非常に多い。彼らは窓口にはこられないんですね。本来、ソーシャルワークが目指している対象であるはずなんですが、彼らはその窓口までたどりつけない。そこで滞留してしまって、どんなことが起こるか。言い過ぎかもしれませんが、軽微な犯罪で刑務所におられるとか、もしかすると路上でホームレスでずっと生活しているとか、自ら命を絶ってしまうとか、路上か、盗むか、死ぬかというすさまじいところで生きている方々の生きづらさを痛感しているところです。ここにソーシャルワークがあるんだろうかというジレンマですね。

そういう活動をする中で東日本大震災が起こります。すさまじい映像をみて胸を痛めて何かできないかと思うていました。その時に湯浅さんや清水さんが、こういう仕組みをつくりたいと思っておられたことが、震災をきっかけに実現しました。震災後、1年たった3月11日に「寄り添いホットライン」です。これは全額、国の事業で、24時間、365日フリーダイヤルで相談を受ける事業はかつてなかったのではないかと思います。湯浅さんから声をかけていただいて困窮者支援、DV支援や社会的に排除を受けておられる方々の支援をしている団体に声がかかりました。事業が始まって今、1日4万コール、想像を絶する数の電話が鳴っています。もちろん1日4万コールの電話すべてに出ることは不可能なので、接続率、つまり実際に電話をとれるのは3%という、著しく少ない数ですが、ここの事業にかかわることになった時に分野を超えた支援者たち、草の根で活動する、社会的排除者を救おうとする分野を超えた支援者たちがいることによって、また再び自分のソーシャルワーカーとしての迷いが生じます。「専門職は何もしてくれないじゃないか」と彼らから言われた時に「そんなことはない」と堂々といえない自分がすごく悔しくて、なぜかという、ここに掛けてこられる方々はどこかの窓口にか

かっている方が、ほとんどなんですね。それでも解決しない、満たされない、満足しないということでもた戻ってここに電話をかけてくるという現実を知った時に私はソーシャルワークに対する迷いが起こる。今も続いている事業で、鹿児島に帰ったら実践を再開しないといけないのですが、どこに専門性をおくべきか、すごく迷っているところでございます。かかってくる方々の多くが十分な支援を受けていないまま、もしくは受けているかもしれないけれども、心理的、社会的に参加の機会を失って孤立を深めていることは調査の中で明らかになってきています。

孤立を深めている人々にやってきていること。精神科の病院とかホームレスの方たちと共通することですが、社会に参加する機会が少ない、ほとんどない。そのことによって他者への信頼が得られないだけではなく、彼ら自身の肯定感情が低くなっていることを強烈に感じます。私は活動の主体としては現場でもっと当事者の活動への参画を重視していて、炊き出しをやってくださっている人たちは元ホームレスの人たちですし、言葉だけではない、当事者主体の取り組みをしていかないとよくならないのではないかと考えます。私が考えるソーシャルワークマインド、みなさまからお叱りも含めて、ぜひいろいろご提案をいただきたい、実践の理論がまだ咀嚼できてないところなので、私なりの論理ですが、まず目の前の傷ついた方々に対してのアプローチ、そこには深い共感と痛みを共有しなければ大事なところを逃してしまい先にいけないのではないかと。目の前の当事者に共感できるかが一番。そして何ができるか、できないかではなく、まず寄り添う姿勢、その中でおそらく私は今までやってきたことはニーズに対して動いてきただけという場当たり的で、恥ずかしい限りですが、ニーズがあったからつくった、やったというだけで何もすごいことはしてないんですが、社会変革に対する志をもつためには目の前にある痛みの共有をして、そしておかしさに気づくことがないとなかなか志はもてないのかなと。よく連携とかネット

ワークとか聞かれるんですけど、私自身は目の前のクライアントのニーズに基づいた連携でないあまり効果がないのではないかと現場で感じています。ということでもた後ほどご質問を含めご意見などいただきたいと思います。以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

大島：鶴田さん、ありがとうございました。すばらしい実践と、まとめのところで深い洞察をしていただきました。ニーズに沿いながらあたりまえのことでしてきたら結果的に今の実践になっていたということでしょうか。それをソーシャルワークマインドということでもまとめていただきました。傷ついたものに対して寄り添う、痛みを共有する。おかしさに気づく、深い共感をする。そしてそこに寄り添う。それを踏まえて社会変革への志を共有する。真の連帯、ネットワークということをいただきました。これを踏まえながら議論を進めていければと思います。続きまして前山さん、よろしく願いいたします。

ソーシャルワークマインドとソーシャルワーカー像の再考

前山：愛知県半田市社会福祉協議会からまいりました前山です。鶴田さんの実践をお聴きして鳥肌が立っていて、ここに立たせていただいています。田中先生から報告をしてほしいといわれて、お役に立てるかなと軽い気持ちで、こんな優れた研究者の方たちの中で私たちの実践をどうお伝えできるか、まだ道半ばなので、みなさまからご意見を賜りながら実践の改善等に参加にさせていただければということでお邪魔しました。

今回、「ソーシャルワークマインドとソーシャルワーカー像の再考」ということですが、私の生い立ちというか、鶴田さんと似たような生い立ちで、高校を出てから3年ほど、東京でぶらぶらとフリーターのようなことをしてしまて全く福祉と関係ない世界にいたんですが、ひょんなことから福祉に興味をもって、当時アルバイト先の先輩から「まだ若いんだから、いきなり働くよりは大学にいつて勉強してこい」といわれて日本福祉大

学の夜間部の門を叩いて入学をさせていただき、今につながっています。

大学を出てから奈良県にある医療法人に就職することができました。その医療法人も私がソーシャルワーカー第一号でした。精神科が400床強、内科、当時という老人病院が120床、老人ホームを開設した頃、老健を立ち上げようというところに勤めていた病院の理事長が先駆的な方で「老健はあっても病院の中のソーシャルワーカーがいないよね」ということで日福大から雇用しようとなったわけです。1990年に大学を出て2003年まで足かけ13年、病院で仕事をしました。最初は介護、デイケアのお風呂介護、おむつ替え、医療事務、リセプトの管理、慰安旅行の添乗員とか何でもやりました。何やってんだろうと思いました。病院の中でいろんな仕事ができ経験もできて楽しかったのですが、やっているうちに「そもそも俺ってソーシャルワーカーだったよね」と。当時の理事長は立派な方でソーシャルワーカーがちゃんと機能しないと病院は成り立たないと30年前から提唱されていて、「前山、よく頑張っているから一人じゃむりだろう。ソーシャルワーカー室をつくらうと。私がやめる頃には部下が13人いて比較的大きな所帯になってありがたかったんですが、なぜやめたのか。病院で勤めている時の壁は病院という強固なヒエラルキーの壁、医者が頂点で看護師がいて、ソーシャルワーカーなんか底辺だよというところがあって、医療の中の福祉専門職だと位置づけて頑張っても意見が通らないことが相当ありました。医者ともよく喧嘩しました。看護師からも嫌われました。「なんでこんな患者さん、入院させるんだ」と怒られて「なんでこんなことで、こんなあたりまえのことが通らないのか」と価値観の壁、医療と福祉の壁を当時20代で感じながら仕事をしていました。だんだん経験を積んでくるといいたいこともいえてきて、同じ年の医者も看護師も増えてきて、現場に意見を通すことはできてきました。次の壁が経営者との壁。退院させたい患者さんがいる、本人も退院したい。ワーカーとして退院に向けて頑張っていくのですが、退院者がごそつと出て入院患者数を上

回る退院者が出てくる。「お前何やっているんだ」と事務長から呼ばれて「お前バカか、どこから給料もらっているのかわかっているのか」といわれまして、それが30代前半ですね。事務方は医学管理量が高い患者さんをどんどん入院させて医学管理量が低い患者さんを退院させていくことによってソーシャルワーカーが利益を生むことを期待していたんですね。そこは医者である理事長が思っているワーカーによるものと違うところがあった。経営サイドの考えに「そうだよな」と思いつつ、30代前半の若造の私は理想に燃えて「この野郎」と思って仕事をやっていたところがあります。今考えれば壁だった。いろんな仕事を10年させていただいて、とはいいながら、こんな私でも、よく頑張っているじゃないかと管理職のポストを与えてもらいました。課長職だったんですが、医療相談課長として、私も現場が大好きなんですね。訪問に出ていくと帰ってこない。前山はいつも席にいない。今もそうですが、当時の上司が「前山、お前は出るな。デスクでいて新聞読んでいてもおこらないからここにいろ。お前は部下を指示するのが仕事だ」と。それが35、36歳、まだワーカーとして発展途上なのになぜ指示する側にいかないといけないのか。そこがほんとにストレスだった。

もういいやと思っていたところ、ご縁があつて愛知県半田市からオファーがありまして半田市で勤めることになりました。社協にくる前には行政にいました。嘱託契約です。平成14年精神保健福祉の保健所業務が市町村に移管される年です。その時に新卒の精神保健福祉士ではとても太刀打ちできないだろうと、行政の精神保健福祉の相談員は中堅クラス以上でないと難しいだろうということで市役所に就職、精神保健福祉の支援を中心に、またご縁があつて「社協へいけ」と。正社員の社会福祉協議会の職員です。病院ワーカー時代の壁は組織の中のヒエラルキーとか経営者と現場の考え方の壁、自分は現場でやりたいのに管理をしないといけない壁を経験して今、社協にきています。社会福祉協議会にきてまた壁があつたんですね。「サイレントプア」という番組が全9回、NHKで放送されて大阪府豊中市の社会福祉協議

会の勝部麗子さんの実践を題材にしたドラマです。そのドラマで初めて社会福祉協議会とかコミュニティソーシャルワーカーを知らない人に届く機会になって社協に対する目が変わってきました。それはみなさんの期待ですね。「ああいうことまでできるんだ」ということを住民の方に知っていただく機会になったと思います。しかし、私がお世話になった半田市社協はそんな状況ではなく、「何のために社協があるんだ」。どちらかと言うとぬるま湯体質だった。新人なのですが、いきなり地域包括支援センター長をやらせていただいて。外から見た時の社協はすごいんですね。いろんなことができる。しかし、なんでやらないんだろうという思いをもっていました。変わらない、変われないという体質でした。病院で揉まれましたので自分一人では無理だと、新しい事業を始める時にどんどん職員を入れてもらったんです。この子がほしい、あの子がほしいということで人事に口を出させていただきました。うちの社協の中間管理職はほとんど外部出身です。新しい血を入れざるをえない壁を感じました。このままでは補助金を切られて社協がなくなるかもしれないという危機感がありました。社会福祉協議会の位置づけが第109条に「社協はコミュニティソーシャルワークの担い手である」と明記されているのに、それをやらない社協は必要ないんじゃないの。

社協を中心に、社協が変われば地域が変わる、地域福祉を推進する核として頑張らないといけない。職員の中での壁、職員間の理解のなさ、という壁があつたり、地域課題を知っていても壁を感じるものですから、今から3年前、事例検討会を毎月全職員を対象に実施しています。会議室をお借りして車座になって事例検討会を2班に分かれてやっています。パートとかも入れて50人職員なので2班に分けて、野中猛先生が開発された半田式ケア会議の手法をそのまま採り入れています。他職種協働のモデルがしっかり盛り込まれていて、社協で事例検討するのにいいツールなのかなと思っています。「一人の困りごととは地域の困りごと」を合い言葉に事例検討会をやっています。今までは半田市の職員のための職員研修、コミュニ

ティソーシャルワーカーのスキルを上げるということ研修をやっていたのですが、効果があったので外部の方も入っていきこうと、奇数月は外部提供者に入ってもらって事例検討会をやっています。だんだん地域ケア会議になってきているなと思っています。

野中式事例検討会をやる場合、参加者、事例発表者、初期ファシリテーター、それぞれどういう獲得目標があるか。参加者に相談支援者、非専門職、ボランティアセンターの職員も半田市職員もあらゆる職員全部に入ってもらっています。住民目線でソーシャルワークを考えるのは大事ななと思っています。社会福祉士やケアマネや精神保健福祉士ばかりで事例検討をやることはなくて、普通の住民の感覚をソーシャルワークの中に取り入れるために入っていただく。数的には非専門職の方が多くなっています。社会福祉法 109 条にあるように社会福祉は地域福祉を推進しなければいけないわけですが、うちの社協の特徴は徹底的に相談支援に特化した社協なんです。社協の中には介護保険事業、障害のある方のサービス事業をやっているところがありますが、うちは一切やっていません。サービスは民間の事業所が頑張っているから社協は公正中立に相談支援や権利擁護だねということで、権利擁護も成年後見制度を立ち上げ、それを NPO にやってもらっているという、相談支援に徹底的に特化しよう。相談支援をやろうとすると社協の窓口や行政の窓口だけでは絶対に無理ですよね。サイレントプア、声なき声を拾うためには窓口にこられる人たちだけに対応してはダメだと、地域福祉、福祉教育がとても大事ななと思っています。脳性マヒの 50 代男性には、「自分は重い障害があるけれども、ちゃんと足を使っていろんなことができるんだよ」と、小学校 4 年生の子どもたちに見せている。子どもはびっくりした顔でみえています。10 歳くらいの子どもたちに障害のある方を実際に知ってもらって、障害のある方が支えられる一方の立場ではなく、障害のある人たちも地域の構成員であることを子どもたちに理解してもらおう。自分たちができることは何かを考えてもらおうという趣旨で半田市の

福祉教育にかなり力を入れています。この子どもたちが 10 年たつと 20 歳、例えば福祉大学に進学したり、福祉の業界に入ってくれたら素敵だと、「究極の青田買い」で徹底的にやっています。

ピアカウンセリングの場面。精神、身体、知的、発達あらゆるメンバーが集まり、そこに専門職も入っていて、統合失調症の当事者の彼がピアカウンセリングを回してくれています。ピアの支えあひも大きいのかなと、子どもたちに知ってもらうことと、障害のある方たちも互いに支えあひネットワークをつくっていく。こういう活動は社協として必要ななと思っています。中学校区、小学校区単位で行う「ふくし井戸端会議」は、市の職員、地域のおっちゃんとか、いろんな人が混じって地域課題について話し合う。大事なことはお茶とお菓子です。お茶とお菓子があるから呼んでくるというところがあって、身近な課題を住民と共有しながら、「認知症じゃないから関係ねえよ」ではなく「俺、認知症わかんねえ」とか「精神障害知らねえよ」というのではなく「身近に障害のある方たち、高齢の人たちの暮らしにくさは身近にあるんだよね」と知っていただくために井戸端会議で地域課題を共有している。

相談支援に力を入れていると、専門職といわれる人たちだけでは無理なことがわかってきます。半田市は人口 12 万人ですが、12 万人のうち支援が必要な人たちは多数いらっしゃる。限られた人間だけでは支援は到底できない。地域の中で埋もれている声を拾うためには地域のみなさんの力を借りる必要がある。そこで、相談ボランティアの養成をしています。今、50 人くらい登録があります。研修をやって事例検討をする。地域住民の方たちと一緒に事例検討をやってグループ発表しています。普通のおばちゃん、お節介なおばちゃんたちに参加していただいて、相談ボランティアとしてのスキルを上げていただく。グループの発表をまとめていただくんですが、「どうやって地域で A さんを支えるか」という事例検討など行っています。「何かがあるまでは私たち地域で相談して受け止めよう」「私たち素人だから何かあったら社協さんが何とかしてくれるからつなぎましょ

う」とボランティアの方がご理解いただいています。半田市のすべての地区ではなく、一部の小学校区で相談ボランティアを組織化した相談窓口が動き始めたところです。13の小学校区に地域住民の方が相談をキャッチできる仕組みをつくりたいと思っています。

2025年問題とよくいわれます。団塊の世代の人たちが75歳以上になってくる時、今よりもっともっと介護サービスがない方とか相談が増えるのではないかと思います。どういう体制が必要かを協議した結果の略図。市民からの相談をいろんなところから受ける「ふくし相談窓口」、これを小学校区に設置をしよう。社協が市と一緒に運営しているボランティア市民活動市民センター、ここに結構相談にくる。よく聞いてみると障害があつて働けないから相談にきたとか、実は福祉の相談というのが相当きている。ボランティア市民活動相談センターでもある程度キャッチできるようにしないといけない。民生委員、自治区のみなさんとも協力を組み合わせてもらうということで、セーフティネットをはる。セーフティシート、これは行政から私たち市、地域包括、対象になっている専門職の方たち、これはシートです。絶対、後ろに逸らさない。野球にたとえると、セーフティネットは内野です。イージーゴロは内野にとつていただく。外野は専門職である私たちがイチロー選手になろうじゃないかと、飛んでくるボールはキャッチしよう。内野は4人ですが、地域福祉の内野手は100人でもいいわけなので、そこが編み目のようにネットになっていただければこぼれてくる相談は相当少なくなるのではないかと。外野に飛んでくる困難事例を我々は後ろに逸らさず、頑張ればいいのかなと思っています。ホームランもあります。フェンスを超えるボールはとれない、これは行政課題、日本国をあげて何とかしないとイケない課題なのかと考えると、せめて自分のところに飛んでくるボールは絶対後ろに逸らさない覚悟、アウトにすれば一番いいんですけど、セーフになってもロングヒットにならないようにちゃんとしかるべきところにつなぐことを覚悟してやるのがセーフティシートの役割かなと。今日、

ソーシャルワークマインドがテーマですが、私が思うソーシャルワークマインドは覚悟、社会福祉の専門家として地域の課題から目を逸らさない覚悟、地域課題を抱えた方を排除しない覚悟が、私の思うマインドかなと思っています。

コミュニティソーシャルワークをやる上で大事なこと。自分たちが住んでいる地域、町の歴史、人を把握できているか、その地域の強み、課題、将来を認識しているのか、社協職員に大事なことは、あれば使う、なければつくることのできるのか、自分の得意分野以外にもアプローチしているのか。「私は精神保健福祉士だから精神障害のことは詳しいけど、障害福祉のことはわからない」と平気でいう人がいますが、キャッチしなければいけないんですね、キャッチすることが大事だなと思っています。解決できないにしても、まず受け止めないとイケないと思っています。制度の間隙を埋める努力をしているのか。知らず知らずのうちに排除する側に回っていないか、こういうことをソーシャルワーカーとして意識しながら仕事をすることがソーシャルワーカーとしての覚悟、私の思うマインドなのかなと考えています。研究者の先生方にとってどういう形で分析いただけるのか、楽しみで、怖いですが、現場としてはこういうことを大事にしながら地域福祉を推進したいということで、日々努力しているつもりです。ご清聴ありがとうございました。

大島：ありがとうございました。ご自身のご経験からご自身の「壁」をお話いただいた上で、半田社協に入られ、最初は県社協に中ではワーストから数えてという話もありましたが、おそらく今はトップになっておられるのだらうと思います。その中でマインドということであると、後ろに逸らさない覚悟というお話、その中で支援の中身、鶴田さんのいわれたことと共通する内容が出ていたように思います。どうもありがとうございました。

このお二人の生きざまとしてのソーシャルワーカー像が伝わってくることを受けて、研究者サイド、教育者サイドでどう受け止めるか。まず保正先生からよろしく願います。

ソーシャルワーカーとしての専門的自己の生成過程

—医療ソーシャルワーカーの実践的変容過程を手がかりに—

保証：立正大学の保証です。魅力的なお二人のお話があり、感銘を受けながら聞いていました。私は日本福祉大学の大学院を出た後、総合病院の医療ソーシャルワーカー、老人保健施設のソーシャルワーカーを経て、大学教員になりました。ソーシャルワーカーとしては6年しか働いていないので、ソーシャルワーカーはどのようにしてベテランになっていくのかのビジョンが見えないなかで、大学教員になったという状況です。

本日は、「ソーシャルワーカーとしての専門的自己の生成過程—医療ソーシャルワーカーの実践能力変容過程を手がかりに—」というタイトルで報告します。シンポジウムのタイトルが「ソーシャルワークマインドとソーシャルワーカー像再考」ということで、テーマが大きくて、ソーシャルワークマインドって一体何なのだろうということを考えても十分な答えが出せていないのですが、これに近い部分で私が行った研究の内容を紹介させていただきたいと思います。

私は医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）がどういう力をつけて、それを変えていくのかという研究を行ってまいりました。最初に研究の目的と方法について述べます。目的は二つです。

一つ目は、MSWの実践能力変容過程、変容を

促すきっかけである変容促進契機となるものは何かを明らかにすること。図1の「実践能力変容過程のイメージ」をご覧ください。新人期の実践能力があり、経験を経て中堅期の実践能力に変わり、ベテラン期の実践能力に移行していくわけですが、その変容の過程でそれを後押しするようなきっかけ（ここでは変容促進契機と名付けました）があるのではないかと考えました。でも総合的にそれらがどんなものなのかが、まだ明らかにされていないので、この解明が目的です。

二つ目は、各能力の変容と能力間の関連性の解明です。図2の「各能力の変容と能力間の関連性」をご覧ください。新人期に能力AやBが身についたとして、中堅期に能力AやBは大きくなるように表しました。そして、中堅期になって初めて習得する能力Cや、ベテラン期になって習得する能力Dもあります。これからはどのようなもので、それぞれの能力間の関連性はどのようなものなのか、それらがどのように変わっていくのかを明らかにしたいと思いました。

次に、研究方法です。対象は急性期病院に勤務する21人のリーダー格のMSWで、半構造的な面接調査をしました。そして2つの方法、事例分析と修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)で分析を行いました。

次にMSWの実践能力の定義をみていきます。さまざまな定義がありますが、それらを検討するなかで私は「MSWに対する要求や義務を遂行するための価値、知識、技術を適切に統合して発揮し、各種システムとの関係構築を行い、専門的自

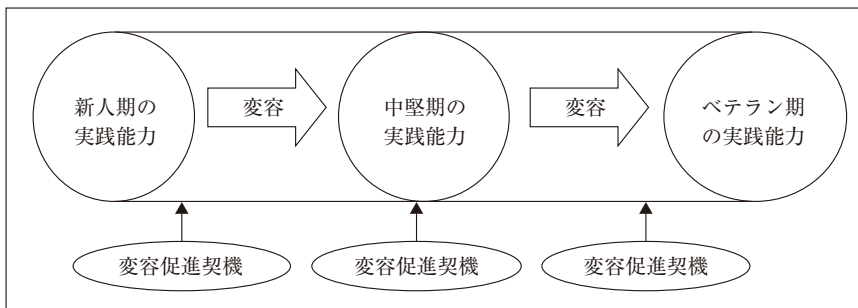


図1 実践能力変容過程のイメージ

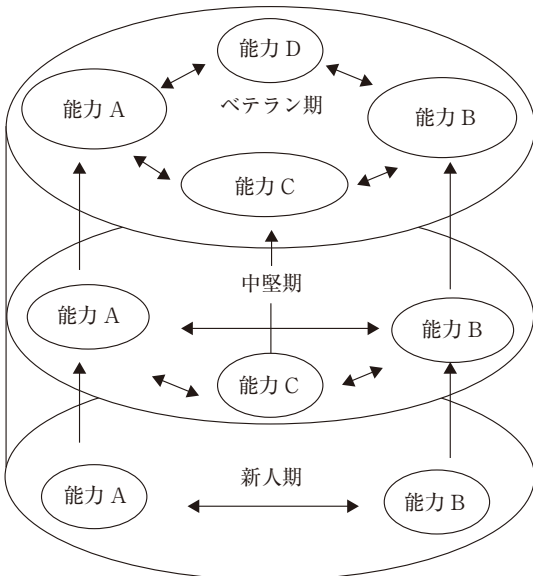


図2 各能力の変容及び能力間の関連性のイメージ

己を確立する能力」と定義をしました。ここには3つの要素が入っています。①価値，知識，技術の統合発揮，②関係構築，③専門的自己確立です。次に，ここでの新人期，中堅期，ベテランとは

どのような時期なのかを定めます。ソーシャルワーカーの研究では，はっきりと新人期はこういう時期で何年までという定義がありませんでした。そこで，一般的な技能習得の5段階について明らかにしたドレイファスモデルを参考にしました。「新人期は状況に適切に対応するための実践経験が乏しいため，程度の多少を問わず，指示，指導のもとで辛うじて実践ができる段階」，「中堅期は意識的に全体的な状況をとらえながら自らのソーシャルワーク実践を行う時期，新人期のMSWを指導できる段階」，「ベテラン期は一つひとつの状況を直感的に把握できて正確な問題領域に的を絞って実践し，リーダーシップを発揮して中堅期のMSWを指導できる段階」です。

今回は研究で使った二つの分析方法のうち，M-GTAを使った研究結果を示したいと思います。M-GTAは生データから少し抽象度の高い概念を作っていく。この概念は複数人のデータにあてはまるものにします。そして，概念が集まってカテゴリーができます。最終的には概念とカテゴリーの関係性を図やストーリーラインで明らかにします。図3の「医療ソーシャルワーカーの実践

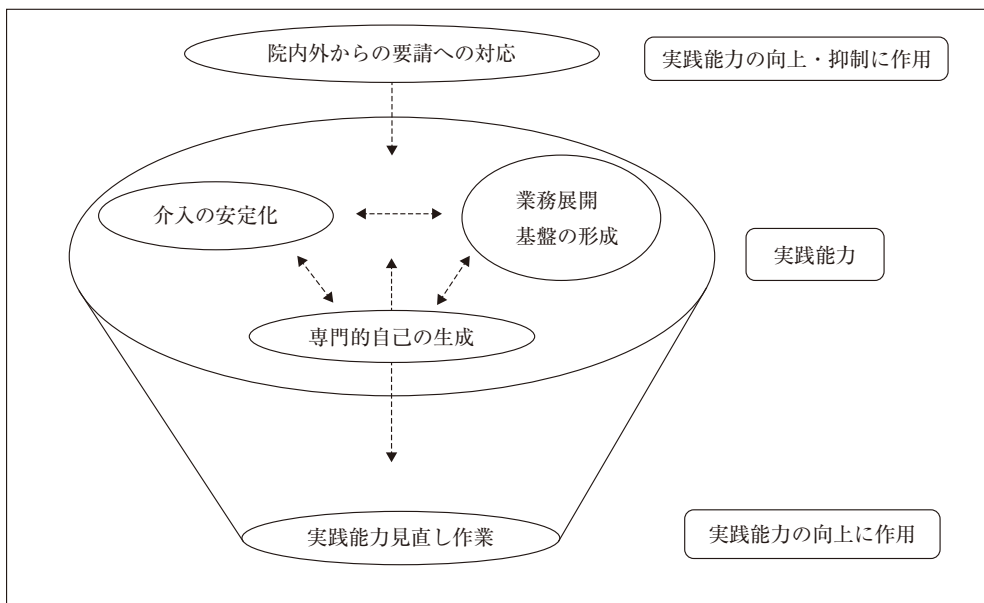


図3 医療ソーシャルワーカーの実践能力の関連性 (カテゴリーのみ記述)

表2 専門的自己の生成の概念

概 念	定 義
何でも屋からの脱却	業務の線引きや患者・家族との距離が曖昧な状態から、業務範囲を明確にし、何でも引き受ける何でも屋からの脱却をはかること。
客観的視座への移行	対象との距離が近すぎる見方や遠すぎる見方から、客観的に見られるようになること。
黒子への転化	自分自身が問題解決の主人公であった状態から、患者・家族自身が問題解決に取り組む主体となれるよう黒子に変わる事。
上に立つ腹括り	管理職になる、後輩が入るなど立場が上がることで腹を括って物事に取り組むようになること。
MSW 視点の俯瞰化	MSW としての視点が、マイクロレベルからメゾレベル、マクロレベルへと広がっていくこと。
業務水準の保持志向化	相談室内外の誰もが質の高い業務を行い、それが維持できる状態を志向するようになること。
自信獲得	自信が無く専門職として気負う状態から、徐々に自信を獲得していくこと。
受けとめ力の涵養	他者を受けとめられるようになること。

能力の関連性」,これが最終的な5つのカテゴリーの関係性を示したものです。真ん中に3つのカテゴリーが入っていますがこれが実践能力にあたり、この3つは相互作用しています。その下側に実践能力の向上に作用する「実践能力見直し作業」のカテゴリーがあり、実践能力の見直し作業をしながら能力が変わっていくこととなります。上側には実践能力の向上・抑制に作用する「院内外からの要請への対応」を入れました。前山さんのお話の中で病院からのベッド回転の要請があるというのは、この部分にあてはまります。

次に、M-GTAの分析結果のストーリーラインを述べます。「急性期病院に勤務するMSWの新人期からベテラン期に至る各能力の変容及び能力間の関連性とは、介入の安定化を図りながら、業務展開基盤の形成を行い、専門的自己の生成を行うことであり、この3つのコアカテゴリーの相互作用で説明できる。それに影響を与える要素が、実践能力見直し作業や院内外への対応であり、実践能力見直し作業は実践能力向上に作用し、院内外からの要請への対応は実践能力向上にも抑制にも働くコンテクストとして作用する」。これが全体のストーリーラインの要約です。今日はソーシャルワークマインドがテーマなので、これに比較的類似していると考えたカテゴリーの「専門的

自己の生成」に焦点を当てて報告をしたいと思います。

まず「専門的自己の生成」について、私なりに次のようにまとめました。「MSWは長い時間をかけて専門職としての自分、すなわち実践的自己を育てていく。それがあたかも双葉が育って、年々、幹が太くなり、葉が生い茂り大木になっていくように実践能力変容過程をたどっていく。その様を専門的自己の生成と命名した。専門的自己の生成とはMSWとしての職業的スタンスである、自身の役割や他者への影響力について理解することや、MSWとしての構え、職業アイデンティティを形成し、育てていくことである」。なんでもありといえそうなのですが、職業的な構えや自分とは何者かという職業的アイデンティティ、MSWとしてのものの見方、考え方を全て含めて専門的自己と表現しています。

このカテゴリーに含まれる概念は8つ生成することができました(表2)。では、「専門的自己の生成」のストーリーラインを述べます。新人期の業務の線引きや患者・家族との距離が曖昧な状態から、業務範囲を明確にして何でも引き受ける、「何でも屋からの脱却」をはかる。それにより、対象との距離が近すぎる見方や遠すぎる見方から、客観的にみられるようになる「客観的視座への移

表3 専門的自己の生成過程

概念	新人期	中堅期	ベテラン期
何でも屋からの脱却	患者の枠に合わせ、自分ができることを増やす。自らの業務範囲が曖昧で上手に線引きできないために、何でも屋の状態に陥りがちである。	MSW 業務を捉え直し業務範囲を明確にすることで、何でも屋からの脱却をはかる。	何でも屋から脱却し、MSW の固有性を周囲にアピールする。
客観的視座への移行 黒子への転化	自分が一生懸命関わることに価値をおく。	自らの立ち位置を確定して、少し距離を置いて対象を見ることができる客観的視座に移行する。自分よりもクライアントが一生懸命やれるように、黒子のように関わるようになる。	客観的視座に移行することで、少し冷静な対応が可能になり、自らのできないことの限界を認識できるようになる。徹底的に患者の最善の利益を追求することが MSW の仕事であると認識する。

行」と、自分自身が問題解決の主体であった状態から患者・家族が問題解決に取り組む主体となれるような「黒子への転化」がみられる。一方で、「何でも屋からの脱却」の影響や、ポジション変更により先輩や管理職になることにより、腹を括つてものごとに取り組むようになる「上に立つ腹括り」を行う。その結果、自分だけでなく相談室内外の誰もが質の高い援助を行い、それが維持できる状態を志向する「業務水準の保持志向化」がみられる。また、「上に立つ腹括り」と相互に影響を及ぼすものとして、MSW としての視点がミクロレベルからメゾレベル、マクロレベルへと広がっていく「MSW 視点の俯瞰化」がある。それらの結果、新人期には自信がないために専門職として気負っていたものが、徐々に「自信獲得」を行っていく。それと同時に、余裕がなく他者を受けとめられなかった状態から、受けとめられるようになる「受けとめ力の涵養」がなされる。

次に、「専門的な自己の生成」が新人期、中堅期、ベテラン期になるにつれどう変わっていくのかをまとめた表3について説明します。概念としては8つ生成されたのですが、似通った概念を一つの箱に入れて説明しています。

最初に「何でも屋からの脱却」について。新人期には患者の枠にあわせ自分ができることを増やします。自らの業務範囲が曖昧で上手に線引きできないため、何でも屋の状態に陥りがちになるの

です。これは、患者さんの要求にそって MSW 自身がやってあげないといけないというかんじで、公私の境が曖昧になり、いろんな意味で業務範囲が増えることを意味します。しかし、中堅期になると MSW 業務をとらえ直し業務範囲を明確にすることで、「何でも屋からの脱却」をはかっていきます。前山さんの話でも、添乗員もやったなど何でも屋になるという報告があったかと思いますが、それがだんだん整理されてきています。ベテラン期になると、何でも屋から脱却して MSW の固有性を周囲にアピールしていきます。

次に「客観的視座への移行」と「黒子への転化」についてです。似た概念だったので同じ箱に入れました。新人期には自分が一生懸命関わることで（これ自体は悪いことではないのですが）、問題解決の主体は患者さんであるのに、ワーカーが頑張ってしまう状況ですね。中堅期になると自らの立ち位置を確定して距離をおいて対象をみることができ、客観的視座に移行します。自分よりもクライアントが一生懸命やれるように黒子のように関わるようにもなります。そのため、自分が前に行くのではなく後ろからサポートする「黒子への転化」と名前をつけました。そしてベテラン期になると客観的視座に移行することにより、冷静な対応が可能になり、自らのできないことも認識できるようになります。患者の最善の利益を追求することが MSW の役割である、と認識していきます。

次に「上に立つ腹括り」と「業務水準の保持志向化」、これも同じ箱に入れました。これらの能力は、新人期にはみられないけれども、中堅期以降に習得し育っていく能力かと思えます。新人期は管理的視点をもっていないので、このような力はまだ身につけていないけれども、中堅期になると上に立つ自覚をもつ必要性を認識し、相談室として一定の仕事の質をもつ必要を感じていきます。この頃になると、ある程度自分自身の援助実践はスムーズにできるのですが、自分だけがスムーズにできてだめで、自分の後輩や相談室全体が一定の仕事の質を保つことができなければと認識が変わります。ベテラン期になると、相談室にとどまらず他職種への教育的な関わりをもつようになります。これはMSWだけが良い関わりをするだけでなく、病院や地域が提供する社会資源やサービスも一定の質以上のものでなければ、本当に良いサービスが提供できないことから、教育的に関わっていくのです。

次に「MSW 視点の俯瞰化」。これは高いところから見渡すというニュアンスです。新人期はMSWとしてのポジションや見方が、先輩や上司からの影響や研修を受けるなかで形成されていきます。中堅期になるとMSWとしての視野が広がり、ミクロ実践だけではなく、メゾ、マクロにあたる管理業務や外部の仕事もソーシャルワークの仕事の一部として位置づけて取り組むようになります。ベテラン期になると、相談室や病院内だけでなくソーシャルワーク全体に関わる視点ができるようになります。たとえば、県や全国レベルの職能団体役員になることも多く、広い視野でMSWのあり方を考えるようになっていきます。

次に「自信獲得」。新人期は自信がない場合と、MSW像ができており自信がなくはない場合が混在しています。自信がない場合には、専門職としての気負いを感じながら業務に取り組むことが多いようです。多くの調査協力者は「新人の頃は自信がなかった」と言っています。そのなかで一人だけ「自信がなくはない」という人がいました。その人は福祉系の4年制大学を卒業した後、1年間、ある病院の研修生になりました。そこで10年

選手のMSWに会って「私も10年経ったらこんなふうになれるんだ。こういう人を目指そう」と自分のロールモデルになるワーカー像を目の当たりにしたのです。その後、一人ワーカーとして就職したのですが、自分が見た10年選手の姿を日々自分で体現しながら仕事をしていたので、「自信がないとは思わなかった」と言っていました。

専門職としての気負いという点では、新人期は他の国家資格をもつ集団の中で頑張らないといけません。そういう気負いがあるからこそ、頑張って研修や独習をして勉強します。その一方、気負いがジレンマになったり、空回りして思うようにいかないことも出てきます。それが、中堅期になると自分を縛っていた気負いから開放される瞬間があるようです。多かったのは入職してきた後輩を指導する時でした。「自分はできない」と思っていたが、自分よりできない人が入ってきて、「ああ、自分はできているんだ」と思う瞬間がある。今までなんとなくやってきた仕事を、「こういう根拠でやるんだよ」と後輩に教えることによって、「自分はこういう根拠でやっていたんだ」と再確認できる。そして余裕が出てくると、今までの「こうあらねばならない」という姿勢から、ふっと肩の力が抜けて楽になったという人が何人かいました。ベテラン期になると実践の積み重ねにより自信がもてるだけではなく、周囲からも認められて仕事がやりやすくなる面もあるかと思えます。

最後に「受けとめ力の涵養」についてです。新人期には相手を受けとめることが困難で共感できない自分を認識することがあります。新人は20代が多いので、40、50、60代の方の相談にのる時、共感的な言葉は発するのだけど心底から気持ちを寄せられない、「実感を持って共感できない」ということを言っていました。それが、中堅期になると相手を受け入れられるようになり共感性が高まる。そして、ベテラン期になると自分が患者・家族に共感するだけでなく、相手も「このワーカーさんなら信頼できる」と安心して相談に来てくれるという安心感をかもし出すことを、自分でも認識するようになります。

最後に、ソーシャルワーカーをサポートする

スーパービジョンで大切なこととして、「介入の安定化」というカテゴリーに見られるように、知識や技術を身につけることだけを先行してはいけなと思います。知識や技術の部分と、関係者や関係機関と良好な関係をつくってスムーズに実践できる基盤をつくる点と、それらを自分の中でコントロールしながら実践を行っていくという専門的な自己を育てていくことが大事だと思います。以上で報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

大島：ありがとうございました。MSWの実践力ということで、専門的自己を確立する能力、専門性の中に自己を確立する能力を位置づけ、その中身について8つの要素、カテゴリーをまとめられました。この部分がマインドに通じるものであるということで、お二人のご報告にあったMSWの視点の変化、上に立つシステムづくり、何でも屋からの脱却とかにつながるのではないかと思います。

マインドでいうと、鶴田さんからニーズに徹底的に寄り添うということが出てまいりました。絶対に後ろに逸らさない覚悟という前山さんのマインド、そのあたりをどう位置づけていくか。MSWを対象にしたことで、ちょっと領域が違うことがあろうかと思いますが、一つ枠組みを示していただきましたので、ここから議論ができるのではないかと思います。

最後に空閑先生からの報告、よろしく願いいたします。

ソーシャルワーカーとその実践を支える「マインド（知性）」の形成

ーソーシャルワークを実践する「人」に焦点を当てた「ソーシャルワーカー論」の試みー

空閑：同志社大学の空閑でございます。4人目の報告になります。昨日のシンポジウムとのつながりでいいますと、「日本のソーシャルワーク実践・理論の継承と創造的発展」というテーマからいえば、昨日の話は理論的なところをどう継承していくかであり、今日のシンポジウムは実践の継

承と発展になるかと思います。もう一つは大会テーマの「日本の」というところも大事ななと思っています。鶴田さんと前山さんの実践をどう継承していくか、まずはお二人が、これまでやめずに現場で踏みとどまって来られたこと、そしてこれからも頑張っていたいただきたいこと、そのような実践を他の人たちにもどう広げていくかという話になればと思っています。保正先生のお話しにあったように、新人期から中堅、ベテランに至るつまずきや悩みがある中での成長のプロセスをどう支えるかということにつながる話でいえば、社会福祉教育、社会福祉士養成、精神保健福祉士養成、特に実習教育のあり方とか、就職した後の継続教育を含めた話ができればと思っているわけです。

話の柱として5つ挙げています。一つは5年前、本学会の名称が「社会福祉実践理論学会」から「ソーシャルワーク学会」に変わったことです。この時の議論が今日のテーマに関連する大事な議論だったのではないかと、そして今も議論すべきことではないかと思っています。2つ目に、この間の社会福祉士養成の新カリキュラムの影響、これがソーシャルワークの現場、ソーシャルワークの形に大きな影響を与えている、ソーシャルワーカーに影響を与えているのではないかということです。3つ目には、マインド、ソーシャルワーカー像ということに重なりますが、ソーシャルワーカーの経験、リアリティをどう言葉にしてとらえていくかということ。さらに、その中で4つ目に「フロネーシス」という概念があるわけですが、マインドの中身として参考になるのではないかということ述べます。最後の5つ目には、私が最近取り組んできているソーシャルワーカー論の紹介をさせていただくという流れで話をしていきたいと思っています。

「マインド」という言葉がテーマになっているのですが、日本語でいうとどうなるか。「知識」でもなく、「心」でもなく、「知性」という言葉がピタッとあてはまるのかなと思います。単なる知識ではなく経験に基づくもの、経験からえられるものとして「知性」という言葉をあてています。その中で「人」に焦点をあてること、すなわちソーシャ

ルワークをただ技術論としてではなく、ソーシャルワークを行う「人」、すなわちソーシャルワーカーに焦点をあてた時に、新たなソーシャルワークの描き方ができる可能性も考えているわけです。

まず、学会名称変更の議論からです。2008年、関西学院大学で開催された学会で名称変更に関する議論がありました。米本先生が会長の時でした。私は保守的な立場、つまり「社会福祉実践理論学会」のままの方がいいという立場から発言させていただきました。結果的に「ソーシャルワーク学会」という名前に変わったわけですが、その時にされた議論、そこに一定、社会福祉実践理論学会の方がいいのではないかという意見があったということは何を意味しているのか、今でも考えないといけないことではないかと思います。それは、一つには、ソーシャルワークというリアリティが社会福祉実践現場で共有されているのか、学会名称をソーシャルワークに特化することにより、介護も含めた社会福祉実践の枠でとらえられるいろんな実践を排除することにならないだろうかということ、今の現場の職員に果たしてソーシャルワーカーとしてのアイデンティティはあるのかということの議論がされました。さらに、改めて本学会の使命としては現場にどう貢献するか、現場に貢献する議論をどう発展させていくかが問われているということです。昔からいわれるように理論と実践の橋渡し、特に日本で、ということにこだわらないといけないのは、伝統的に社会福祉施設で働く社会福祉士が圧倒的に多いからです。最近でこそ地域包括支援センターなどがあるわけですか、レジデンシャルな部分でのソーシャルワークに貢献することも本学会としては考えていかないといけないと今も思っているわけです。

次に社会福祉士養成新カリキュラムの影響が大きいということです。私の大学でも夏休みに学生たちが実習にいきますが、最低4回の実習指導、訪問指導をやります。これは学生にも、実習を担当する教員にも、大変な負担となります。しかし、法律改正による言わば他律的な形での現在の実習指導の形ではあるんですが、現場職員の実習指導

者研修や学校側の担当教員研修があるわけです。そのなかで、ソーシャルワークという言葉が浸透してきたのかなという感じはします。実際にどんなプログラムやソーシャルワーク実習をつくっていったらいいかわからないという施設などにかかせてもらって一緒に勉強会や作業をすることもあります。そんなことを通して、実践現場にもソーシャルワーク、ソーシャルワーカーへの意識の高まりがみられてきていると肌で感じています。これに伴って実践者と養成校教員との学習会、研究会などが以前よりもやりやすい環境ができたかなと思います。実習教育と一緒に取り組むことをきっかけに、ソーシャルワークの研究、事例研究がやりやすくなっていると感じます。実習プログラムの作成に関する学習会、研究会を行うなかで、特に変わりつつあるなというのは生活施設でのソーシャルワークへの意識の高まりです。自分たちがやっている実践を振り返って、ソーシャルワーク機能の抽出作業をやって、改めて「これがソーシャルワークなんだ」と認識して、自分の実践とつなげて理解していくような、すなわちソーシャルワーク理論と実践をつないでいく場づくりができています。これからますます、そういう働きかけが必要だと思っています。

3つ目にマインドということです。ソーシャルワーカー像をどう考えるか、教育の立場からしますとソーシャルワーカーの経験、ソーシャルワーカーのリアリティ、鶴田さんとか前山さんの話をどうとらえるかが大事になるだろうと思います。ドナルド・ショーンの「反省的实践家」という専門職モデルが重要だと思います。技術的合理性に基づく熟達者というのではなく、「行為の中の省察」に基づく反省的实践家としてのソーシャルワーカー像をしっかり位置づけていく必要があると考えています。ただ、「反省的实践家」という言葉をそのまま学生たちに言っても、ピンとこなかったりしますので、私は授業の中では、「振り返り、気づき、発見の専門職」としてのソーシャルワーカーという言葉で伝えるようにしています。ソーシャルワークは、あらかじめ「こうすればこうなる」という答えがある世界ではなく、同じよ

うに子育てや介護での困りごとでも、家族ごと、個人ごとに状況が違うなかで、いかにその都度のかかわりを振り返ってたくさんのことに気づけるかがソーシャルワーカーの専門性です。そして、その気づいたことを、次の支援のヒントやアイデアにしていって、実際に実践として実行していく、このサイクルを個人としても、チームとしても、どれだけ豊かにできるか、手厚くできるかということがソーシャルワーカー個人としても、ソーシャルワークを行う組織全体としても大事なのかなと思います。

もう一つ、この間、マインドということを経験している中で、「科学技術社会論」という議論が今回のマインドを考えるにあたって参考になるのではないかと思います。科学技術社会論というのは技術と社会の関係についてさまざまな社会科学の観点から学際的に研究するものです。たとえば科学の囲い込み症候群、つまり何でもかんでも科学でやるということが、社会や人間に関する問題の本性にふさわしい仕方と考えたり、行為したりすることを奪ってしまうということとか、科学者が同業者評価を自分の行動の指針にしている限り、その研究は当事者の立場や社会的要請から離れていく危険性があるとかいう議論です。先日STAP細胞のことが話題になりました。もちろん研究するにあたっては、論文が学会誌に載ることが大事ですが、そっちの評価ばかりを指針にしていると結局何のための研究かがわからなくなる。かといって学会誌に載らないと業績にならないということで、ジレンマでもあるんですが、何のために研究しているかを改めて問う必要があると考えます。ソーシャルワークを研究する限りは、人が生きて生活することにかかわる実践が、その人の生きる意味にもかかわること、そこには決して科学的にだけでは語られない、語るべきではない問いもあるわけです。生にかかわる営みにふさわしいソーシャルワークのあり方と方法を支えるマインドと技術に関する議論が必要ですし、それにはソーシャルワーカーが働く場所とか経験、そこには当然、当事者、利用者、地域があるわけですが、そこへの関心が基本になければならないだろ

うと思っています。

その一つの参考として、「フロネーシス」という概念が使えるのではないかと思います。ソーシャルワークの実践は利用者、クライアント、地域の状況にあわせて、社会福祉士であれば資格取得で勉強した知識とか制度のことや技術を、それぞれの状況にあわせて駆使していく柔軟性、臨機応変さ、広さ、しなやかさ、それぞれの状況で何が重要であるかを見定める判断力、鋭さが求められる。これらを支えるのかマインドだろうと思っています。たとえば何かを判断するというのは、決めつけることとは違って、何らかの葛藤を伴う体験であると思いますので、その意味では葛藤するというのを支えるマインドが必要だと思っています。

そういうマインドを言語化する作業が、実践研究として求められると考えます。決して経験主義に陥ることでもなく、もちろん科学主義としての知識主義でもないというスタンスでの取り組みが必要だと考えます。実践研究については、自らの経験と習慣を超える方法を自らの経験の中から見いだす作業といわれていますが、そういうことに挑戦していくのがソーシャルワークの研究、教育の中で必要なんだろうなと考えています。この作業から得られていくものが、ソーシャルワークの「フロネーシス」であると考えられます。フロネーシスはアリストテレスの倫理学の言葉だそうですが、動く知、為す知、実践知、賢慮、熟慮という、経験に基づく行為や実践の中にあって、実践を支える臨床の知といえるものです。ソーシャルワークという経験の中にあるフロネーシスを引き出す作業が必要だと考えます。それを言葉にして体系化していくと、マインドというものが見えてくるのかなと思っています。

そして、そのための取り組みとして、「ソーシャルワーカー論の展開とソーシャルワーカーの当事者研究」を挙げています。ソーシャルワークはいろんな場で論じられてきていますが、私は「ソーシャルワーカー」も論じなければいけないと考えました。ソーシャルワークの方法とか技術というのは、ソーシャルワーカーである「人」を通して

表現される、具現化される、その意味でソーシャルワーカーという身体性をもった主体となる「人」に寄り添った研究が求められる。ソーシャルワーカーの経験、実践感覚も言語化して、表現していく取り組みです。ソーシャルワークを担う主体を離れたソーシャルワークの知識、方法、技術論ではなく、ソーシャルワークを実践するソーシャルワーカーであることを論じる。そういう作業があるのかなと思って「ソーシャルワーカー論」として取り組んできております。

もう一つ、「日本の」ということですが、施設、地域での地道な実践がたくさんあります。それをしっかり言語化して継承して、それをソーシャルワークとして位置づけ直して発展させていくことができなければいけないと思います。それは、これまでも行われてきた利用者とその生活を支える実践と方法を、すなわち社会福祉援助とその専門性を、日本のソーシャルワーク、ソーシャルワーカーとしてとらえ直し、その実践、経験を言葉で示すことです。日本のソーシャルワークを豊かに表現する言葉を、さまざまな社会福祉援助の現場で、そこで働くソーシャルワーカーの経験とリアリティから創出し、ソーシャルワーカーとそのアイデンティティを支える知として集積していくことです。今日のお話しにあった鶴田さんとか前山さんの揺らぎ、そして揺らぎながらもソーシャルワーカーとして支えていくという知性、マインドをどうやって抽出できるかというのが研究のテーマになります。そのための取り組みとして、「当事者研究」という方法があるわけです。これは、有名な北海道の「べてるの家」で行われてきた取り組みですが、これをソーシャルワーカーがやったらどうなるかということです。社会福祉士もケアマネジャーの方もそうですが、今は本当に研修がたくさんあるわけですね。研修の受講で疲弊しているような状況があって、もちろん研修は大事なのですが、一方で研究という取り組みをすると元気になってもらえるのではないかと思います。難しいことを難しくやるのではなく、難しい本を読むのでもなく、自分の経験やソーシャルワーカーであるという仕事の現状を、「事例」とし

て研究しようじゃないかということでやっています。その中から実践の言語化を通して、より適切なかわりや支援のあり方を見出していく。正しい支援かどうかはその場では判断できないのですが、より適切な支援、よりふさわしい支援、そういうものを見いだしていく作業です。実践を支える理論、知識、技術、つまり社会福祉士養成課程の中で学んできた知識を、もう一回、実践経験の側からとらえ直して、生かしていこうとする作業です。理論と実践とをつなげていくこと、ソーシャルワークマインドをとともに獲得して、共有して育てていくこと、そんな実践における新たな地平を開いていくような取り組みができればいいのではないかという思いで研究を進めています。もちろんソーシャルワーカー養成という教育的な視点を含めて、さらにテキスト的な知識も含めて、それらを研修という形だけではなく、研究の取り組みの中でとらえなおすこと。そして、自分たちの経験、苦勞、悩みの中からそれを乗り越えていく、壁の乗り越え方を獲得していくサポートができればいいのかなと思って取り組んでいるところです。私の話は以上です。ご清聴ありがとうございました。

大島：教育の視点から実習教育、継続教育の課程についてお話をいただきました。現場の実践をどう形に言語化して後輩たちに受け継いでいくかという視点があるだろうと思います。その時に実践知、経験知、フロネーシスという言葉がありますが、壁にぶつかった時に生み出されてくる知恵、価値と関連づけられた知識という側面があるのではないかと思います。そういうものを抽出して後輩たちにどう伝えていくか、課題を提起していただきました。

前山さんの報告では事例検討、研修のことが強調されましたが、事例検討ではうまくいかないことにどう対応するか。住民のみなさんにも学んでいただくという、後輩たちに伝えていく中で前山さんのご経験が伝わっていく側面があるのかなと思いました。後半、ディスカッションの中でも深めることができればと思います。鶴田さんのお話はインパクトのある話で、後輩たちにどう伝える

のかという話は専門職としての自己を確立することでは、とても重要な部分だと思いますので、これも後半につなげて、また保正先生が提起されたテーマでもありますので、議論ができればと思います。実践を受けての教育・研究というお話がありましたので、壇上でのやりとりをさせていただいた後でフロアのみなさんにも参加してディスカッションができればと思っております。それで休憩に入ります。

大島：それでは後半の討論を再開いたします。実践家のお二人の報告と、教育、研究に携わるお二人の先生方の報告がありました。それを受けてご自身の経験をどう後輩たちに伝えていくかという観点で、専門的自己の確立が一つのキーワードとして出ていますが、コメントをいただければと思います。

鶴田：そうですね、私はまだよくわからないです。どう伝えるかといわれても自分がまず立っていないところなので、実はすごいことをやっているようなことをみなさんに誤解を与えてしまったら申し訳ないんですが、きちんと食べられてないんですね、この7年間、ホームレスの人たちと8年間やってきたので、それを後輩にどう伝えるか、専門性がどう、といってられない8年間だったなと思っています。ようやく今年4月、障害福祉サービス事業所を立ち上げて新たな展開をやるようとしているところで、来年、笑っているか、どうかという際どいところなんです。そこで余裕が出てきた時に専門を目ざす方々に伝えられることもあるのかなと、今日の先生方のお話を聞いて、すごく勉強になりました。ただ自分自身はどうかといわれると、まず広げられていないところで非常に悔しいです。

大島：実感のこもったお話ですが、一般社団法人をつくられてスタッフの方がいらっしゃいますね。仲間はどう、ご自身の体験を伝えていくかについては、工夫しておられることはありますか？

鶴田：NPOの話をしみますと、そこにいる職員もまた社会活動家の方たちばかりで、かなり手荒な支援をずっとやっていたんですね。その中に私が

ポツと入って、ホームレス支援は2年先行して行われていたものに僕が入った形なので、専門性というよりは根っからの社会活動家が集まっているところに私が入り込んで、どう専門性を発揮するか、しばらくは様子見だったんです。福祉補助金をまとめるマネジメントをした後に私は社会福祉士を3人入れたんです。そしてその中で僕らができる専門性の発揮の仕方をここで研究しようじゃないかと5年くらいは仲間と一緒に貧困の問題、福祉における我々の立ち位置を語り合う感じで実践を続けてきたなど。伝えるというより語り合ってきたというか。来年自分たちが雇用されるかどうかかわからないけれども、仲間に対してともに語り合おうよということでした。

大島：ありがとうございます。その語りの内容も伺いたいなと想いながら、次に前山さんから。

前山：先生方からコメントをいただいたこと、お二人の研究者の先生からどうみていただいているのかなと考えながらお聴きしていました。鶴田さんの話を聞かせてもらって感じたのが、どう伝えるかを考えた時の僕らの立ち位置が、鶴田さんと比べると恵まれているんですね。NPOとして活動を頑張って財源もないところで社会的な使命感をもってやっていらっしゃる。ようやく新しい法律ができますから、そこにいくらかお金がつくかもしれないですが、たとえば僕たちのように社会福祉協議会職員は恵まれているわけですよ。そこで何を伝えるか。「僕らの食い扶持は間違いなく公費だよ。公金だと考えた時に、果たさないといけないことは社会的使命が絶対にあるよね。漫然と仕事をすることはありえないよね」ということが僕たちの中では絶対にぶれちゃいけないのかなと思って聴いていました。社協職員になった時、老舗NPOの代表から、かなり厳しいことをいわれました。愛知県半田市はNPOが盛んな土地柄で鶴田さんのような方が何人もいますよ。すごいなと思って、関西から奈良県から流れてきた僕としては「半田というところはどうしてこんなにNPOが盛んなんですか？」という、あるNPOの人がキッと顔を上げて「行政や社協がだらしないからだよ」と真顔でいわれたん

です。アッと思って、僕の中で二つの壁、自分の中で気づかされたのが、県社協から半田市社協はワースト3だといわれたことが一つ。「あんたたちがだらしがないから」といわれてNPOの代表の言葉がすごく重いんです。NPOの人とかは手弁当でがんばっている人たちがたくさんいる中で、一定の公金が投入される社会福祉協議会という組織で、この福祉の仕事をさせていただいていると考えたら「社協、何やっているの、といわれたら絶対だめだよ。みなさんからの血税で食わせてもらっていると考えると、まずそこをわきまえて仕事をしないと専門職面をして仕事をしていてもだめなんじゃないかな」と、そういう気持ちの中で地域の中に入っていることによって、ひっかかりどころを事例検討でやっていった、それがポイントになるんですが、このケースの中で「ここ、ひっかかるんだよね」。そこをどう磨くか。どう後輩に伝えるかは難しいですが、職人が腕をみて盗めという、それだけでもむりかなと、お二人の先生方が理論として出してくださったことが、これから我々が伝えるすべとして参考になるのかなと思っています。

大島：お二人のコメントを受けて、保正先生、空閑先生から何かございますか？

保正：お二人の実践の経験の話聞いていて、ベテランのソーシャルワーカーの調査に出向いた時と同じ感覚をもったのです。それは、統合された一つの物語がある、その人の中で一つの完成した話があるという感じです。それはお二人が大事にされているソーシャルワークマインドというものがあるためだと思います。そのような譲れない核となるマインドがあり、そこに立ち戻りながら実践しているという、何か集約するものがあるから一つのまとまりがあるのではないかと感じて聴かせていただきました。ソーシャルワークマインドというは、たとえ他の分野や他の現場に行ったとしても、その人のなかで大事にされているものであり、それぞれの方が現場のなかでつかんでいくものかなと思います。

空閑：当事者研究ですが、語り合う場であるところと重なります。鶴田さんがいわれる、

語り合う場をつくること。単なる愚痴に終わるのではなく、その中から自分たちの仕事に生かせるものをお土産にもって帰る共同研究をやっていますし、前山さんのように葛藤とか悩みがあって、たとえば利用者さんのことがどうしても好きになれないとか、共感できないとか、悩みを抱えることがあるわけですね。その時に「共感するようにもっと努力しましょう」ではアドバイスにならないわけで、共感、受容が大事なのはわかっているけれども、どうしたらいいのかわからないから悩むわけで、共感することの中身は何だろうということを見る必要があると思うのです。覚悟の中身は何か、どういうところで覚悟をするのかをテーマに自由にグループでやると、いろんな言葉が出てくると思います。それを集めていくと、マインドになっていくのかなと、そういうところに我々のような教育、研究の場にいる者が身を置くこと、そしてそこに身をおいていかないと、学生たちにもリアルなソーシャルワーカー像は伝えていけないのかなと思っています。

大島：ありがとうございます。この後はフロアのみなさんも含めて議論を進めていきたいと思っています。

フロア1：専門職、プロフェッションとしてのソーシャルワークは、ずっと40年くらいのテーマで、昨日は仙台で学会をやったんですが、空閑先生のコメントですか、この学会の名称変更に関して社会福祉実践には5つの内容がある。一つはソーシャルワーク、二つ目はケアワーク、3つ目がレジデンシャルワーク、4つ目がスーパービジョンとかマネジメント、5つ目が日本ですから保育実践もある。はるかに社会福祉実践より大きいと論争の時からいつていました。大変面白い言葉で「反省的实践家」という専門職モデル、その次に「行為の中の省察」といわれたんですが、この場合、精察の方がいいのではないかと。デカルトの『省察』という本があるんですが、コギト・エルゴ・スム、「我思う故に我あり」、あれは反省して洞察するということなんですね。

質問は保正先生になんですが、専門的自己の生成が発展することを綿密に分析して下さってあ

りがたいのですが、ちょっとだけ気になる場所があり、最初のスタートが「何でも屋からの脱却」なんです。何でも屋というのは否定すべき響きがあるんですよ。確かに世界的にもそうで英語では「あらゆる職業のジャックさん」と揶揄されてきたんですが、実はそこにかなりソーシャルワークの今日のテーマである本質的な部分が含まれているということなんです。つまり専門分化してしまったことによって逆に見落としてきたものがありはしないか。1970年代は「愛されぬ専門職」、リシヤンの反省なんですけど、どんどん専門分化されてきて、忘れてきたものがある。私自身も施設の指導員だった時、ほんとに何でも屋だったので確かに気になることはあるんです。このことに関していくつかの意見が出てきた。一つは大塚史学で有名な東大教授の大塚久雄さんが社会科学を学ぶことの意義についての中でいっている論文ですが、つまり専門性とといっても理論的専門性と実践専門性があるって、理論的専門性は細かく分かれていく専門分化なんだと、ところがソーシャルワーカーのような実践的専門性は総合科学であって生活をみていくんだと、制度の谷間、生活の谷間、ニードの救われない谷間を、まさにやってくれるのがそうではないかと。そこはまた別の角度でいうならば岡村重夫先生の全体性にもいくのではないか。世界的にどうであるか。1980年に多くの顔をもったソーシャルワーカーという本が出た。その本が出た時にパッと思ったんですが、日本介護福祉士会初代会長がいつも社会福祉士を揶揄する時に顔の見えないソーシャルワーカーと、何をやっているかわからない。何でも屋だといっていたんですが、そのことの中にはあらゆるところに顔があって、いろんなところに顔を出していくことに関して、自分は制度の狭間で苦しんでいる人たちに対してそういう仕事ができることについて誇りと意義を感じるというんです。何でも屋は確かに気になる場所ではありますが、そこからの脱却といわれてしまうと気になる場所があるので、ご意見を聞きたいと思います。

保正：ありがとうございます。私も言葉足らずのところがあるのかなと思ったのですが、ベテ

ランのソーシャルワーカーのインタビューなので今から20年くらい前の話を聞いたのです。その中で多分、今だったらMSWがやらないのではないかとというような仕事、例えば臨床心理士や医療事務が確実にやるべきことがあって、それらを徐々に整理してきてMSWの仕事の範囲をつくってきたということで、ここでは「何でも屋」という言葉を使ったのです。でも、お話を聞いていると包括的な生活をみるという意味からは、もう少しこの名前を検討する必要があるのかなと思いました。

大島：他にいかがでしょうか。

フロア2：香川県の保育現場で働いています。今回のテーマがマインドということですが、ソーシャルワークのマインドとソーシャルワーカーのマインドで重なる部分もあると思いますが、その部分を整理する必要があるのではないかと、お話を聞かせていただいて感じたんですが、厳密な定義ができていないので難しいと思いますが、今の時点で整理すべきところがあるのかについてお聞かせいただければと思います。

大島：ソーシャルワークのマインドとソーシャルワーカーのマインドが違うのではないかと。

フロア2：重なっている部分もあるが、違う面もあるのではないかと。

大島：そう感じておられる部分をおっしゃっていただければ。

フロア2：ソーシャルワーカーの本質的なところで根底で重なっているが、個人レベルのワーカーとして重要視するマインドもあるのではないかと。職業としてのマインドとか、個人としてのマインドがあるのではないかと感じています。

大島：ソーシャルワークの方が一般的なもので個々のワーカーのマインドは個々の経験に基づいて生きざまとしてのソーシャルワーカー像がもう一つあるのですが、その依拠するものがあるのではないかとご指摘ですね。おそらく保正先生のお話が医療ソーシャルワーカーのまとめで、管理職の位置づけとか特徴的なのかなと伺っていました。地域現場、生活困窮者の支援領域ごとのマインドとか、鶴田さんのマインドとか、前山さんのマインドは、それぞれにみなさんの生きざま

がある、そこで形成されるところがあつて、それとの関係性になりますかね。そのへんいかがでしょうか。

空閑：大事なご指摘だと思います。今日のお二人のお話のように、すばらしい実践を大事にやっておられる方があちこちにおられる。それを個人のものではなく、共有財産としていきたい。それは教科書的なものではなく、こういうことがあるからやっていけているとか、こういうことで乗り越えてきたとか、生き方とか、キャリアを形成してきた、そこで形成されてきたものは何かを示すことです。個人個人のなかにあるものを語ってもらうことによって、言葉にすることによって、個人としてのマインドの部分、ソーシャルワーカーとしてのマインドとして、共有財産として学生たちに伝えられるのではと思います。実習で学んでいる学生に、こういうことをアドバイスできるのではとかいうことも、共有財産として獲得できるのではないかとイメージをもっています。

前山：大事なポイントをご指摘いただいたかと思ひます。僕の中でもうまく整理はできていませんが、社会福祉の仕事をする実践者として絶対にぶれてはいけない倫理綱領にあることもマインドと呼ぶかもしれないし、それはおそらくどの分野においてもそれだけは絶対に腹の中で落としながらやらないといけないものがある。多分、似たようなことをやっているように見えて、鶴田さんの実践と僕の実践は違うところもある。それが鶴田さんの社団法人の立ち位置の中でのマインドと社会福祉協議会としてのマインドが多分違う。あとは地域差もあるかもしれない。個人技としてその人だけで終わってしまっているのか、技術をどうやって言語化しながら伝えてくのかというところも研究会でご議論いただけるのかなと思うと、僕の中では法律とか憲法、分野別の法律、民法とか刑事訴訟法とかの分類でいく、個と集合体のかなと解釈しています。僕らとしては社協としての職員のマインドを、そこを徹底的にやっぺいこう。病院ワーカーのマインドと同じかどうか、検証してみないといけないと思っています。

大島：絶対逃さない覚悟は、いかにも社協らし

い、ソーシャルワーカー的なマインドなのかもしれませんが。

鶴田：あまりきちんとした言葉で伝えられないのですが、私はソーシャルワークとしての、ソーシャルワーカーとしてのことより、どこにいても誰であつても共通した、人に対する、世の中に対するおかしさとか、痛みを忘れてしまつてはいけない。それはどんな職場にいてもそこが共通してないと話にならないと私は思うんです。議論ではなく、難しいことはいえないのですが、ホームレス支援をやっていた時に、ある病院のソーシャルワーカーから一本電話が入つて「患者さんが退院する。鶴田さんのところでホームレス支援をやっているから、送ります」といって公園に置き去りにされたんですね。私はソーシャルワークを語る以前に痛くないのかというのが一番問題であつて、痛みを共有して世の中のおかしさとか、制度をつくれれば絶対、谷ができる、そこにかかわることに使命をもらった私たちが、なぜそうなるのかという、それが不思議でたまらない。どんな立場でもかまいません。前山さんのような方がおられれば同じ志、共通しているものがあるから頼めるし、寄り添いホットラインをやつて感じたことは、そうじゃない専門職が多いからでないか、基本的な熱さというのは、あたりまえの痛さを感じられることだと私は思っているんです。言葉でうまく表現できないのですが。

大島：本質的なことかと思ひます。先程、問題提起しましたが、鶴田さんのおっしゃるおかしさに気づくとか、寄り添うという狭間の部分にきちんと目を向けるマインド、絶対、後ろにそらさないという覚悟、そのあたりは保正先生の図の中に位置づけられるものがありますでしょうか。システム化して管理職になっていって、自ら最前線のところで活躍することができない時にチームの中で管理職が出ていっているのかどうか。管理職の立場の方が身を張つて、絶対、後ろに逸らさないという覚悟を。そのあたりの図の中でどのように？

保正：図4をご覧ください。この中で覚悟という点でいえば、「上に立つ腹括り」という覚悟を

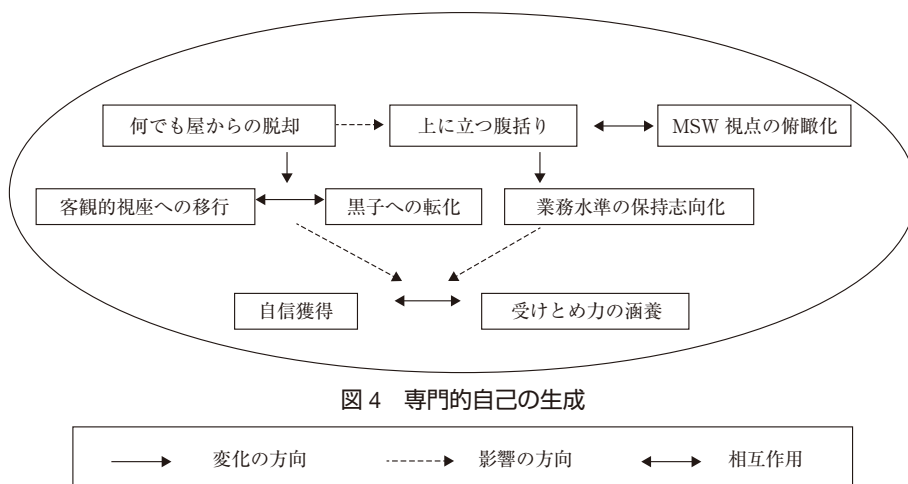


図4 専門的自己の生成



もって相談室を維持していく、質を向上させていくことに該当するのかなと思いますが、それ以外の部分のどこかに還元させてしまうのも無理があるかと思います。MSWとしてのものの見方、考え方、行動の仕方というところで、自分はこういうところを大事にしているというところが、この部分に関連してくるのかなと思います。

大島：フロアからいかがでしょうか。

フロア3：議論の中でどう伝えていくかということが話されていますが、逆に今までどう伝わってきたのかということを検証していくことも重要ではないかと考えています。自信獲得の中で、新人の方がベテランの方の姿をみて「10年後にはこうなると自信をもてた」というのも重要なキーワードだと思います。鶴田さん、前山さんは自分で自ら開拓していったというイメージを受けるのですが、お二人も誰かの影響を受けたマインド、実践理論の根拠になるものを誰から受け継いできたということがあるのか。これがターニングポイントだったということをお聴きしたいことと、保正先生にはどのようにそれが伝わってきたのか。10年後のベテランの姿をみて「自分もこうなれる」というのが一つのキーワードとして「こうやって人は受け取っていくんだな」と研究の中で感じたことがあれば教えていただければと思います。

大島：とてもいいご質問で、本来、コーディネーターがしないといけない質問だと思います

が、鶴田さんに影響を与えた先輩のワーカーはいらっしゃいますか。

鶴田：1年目のMSW時代は一人しかいなかったたので誰もいなかった。地元のMSW協会の先輩方から、いつも「大丈夫だから、そのうちきっとベテランになっていっていい仕事ができるようになるから」と基本的な部分だけは一緒に語っていかうと伝えてくださったんですが、我慢できずに飛び出して。その後、精神科の領域に入って、精神保健福祉領域は長い間、人権侵害とか長期入院の問題があつて、地域支援を実行している先輩方がたくさんおられたわけです。その方々が非常勤で病院におられて、その方の後ろをみていったというのはあります。ただその後、一番学んだのは目の前にいる当事者の人生、悲惨なという失礼かもしれないけど、ともにこの期間、おかしさと一緒に語ってきたことが一番の原動力だったかなと。今、私も感じることは、職人肌であることも精神保健福祉士の感覚ではあるんですが、それはそれとしても、なんか僕らがやってきたことが、研究の方々と一緒にきちんと明らかにされるものがないと、まずいのではないかと、今は感じていまして、ご質問には興味をもちました。

前山：ご質問いただきながら鶴田さんの話を聴きながら走馬灯のような思い出がよぎったのですが、病院ワーカー時代は私も1号ワーカーで入って先輩ワーカーはいなかった。恵まれていたのが

保健所の精神保健福祉相談員の方です。奈良県下のすべての保健所の相談員が日本福祉大学のOBだったんですね。奈良県の地方都市の病院に1号ワーカーできたやつが、どうもあいつも日福らしいということで、大学のつながりは大きい、保健所の相談員の先輩がしょっちゅうくるわけです。私の仕事ぶりみる。評価をしてくれる。コテンパンにやられまして「そんなのじゃだめだよ」と相当怒られました。職人肌のワーカーが多く、ある人は県の監査をやる立場の方で、精神保健福祉法が全部頭の中に入っているようなすごい人だったんですけど、そういう方から何が大事かをすごく教えもらいました。僕の場合は院内に先輩にあたる方がいらっしやらなかったということもありますが、院外にそういう方が、大学の先輩があたたく指導してくださった。9割、厳しかったです。千本ノック受けたような指導もありましたが、それがよかったなと思っています。社会福祉協議会にきてからは社協の強み、全国組織で、全国ネットワークがありまして、全国社会福祉協議会のいろんな集まりに「手伝え」と呼んでいただいて、そこで社協マン、社協ウーマンにあって、豊中の勝部麗子さんには衝撃を受けて、ドラマになるのはわかる。あのドラマ、ほとんどそのままで課長さんと恋愛になったのはウソですけど、「私の旦那は役所じゃないし、家はクリーニング屋じゃないけど」と。でもケースはすべて事実で、それを社協ウーマンとして勝部さんがどうやって立ち向かっていったのかを、ご縁があって、お酒を飲みながら「こうなんだよ、ああなんだよ」と聞かせていただく。すごい人にあう時間を自分でつくらなきゃいけないなと想いました。自分がいろんな方からすごいところをいっぱい見せていただいて「あの人に追いつけるように頑張ろう」とか、10年選手と。組織の中にいなければ外に求める。決して一人で切り開いたわけではなくて、すごい人たちに育てていただいたということがあります。最後に僕も地域の方たち、地域住民の方たち、対象者の方も含めて、リアルに生活の困りごとを伝えてくださる方たちが一番の所産になるのかなという、そこは鶴田さんと共通する

ところですよ

保証：MSW はいろいろな場でいろいろなことを伝えられてきているのですか、一つ例を挙げて本の中から紹介したいと思います。あるベテランの方が新人期に研修を受けて「自分が経験していないとわからないことが多くて、患者さんにも支援してあげられないことがいっぱいあるからだめだな」と研修会で話したら、他病院の先輩ワーカーから「経験しないと支援ができないというのは間違った認識である」と伝えられました。その人に言われたのは「ソーシャルワーカーは経験を伝えていく仕事ではない。もちろん経験は大事だけれども、経験を伝えていく仕事ではない」ということと、「患者さん、家族の人と一緒に考えて、一緒に答えをみつけていくことになるのではないか」と言われて「そうだなと思ったのですよ」と。この方は自分が新人期の時に学んだ考えを相談室の後輩たちに教えていると言っていました。こんなふうに、まずは人ですよ。ロールモデルとなる人、先輩、同僚、他職種もあるかもしれない。他の病院のスタッフとか、大学教員も結構あります。ある大学教員の福祉運動論の考え方を守って何十年もMSWをやっている人もいますし、別の大学教員の研修を受けて180度今までと考えが変わってすごく自信がもてたという人もいます。いろいろなところで、人の影響を受けることが多かったのではないかと思います。

空閑：教員の立場でいうと、実習が大事だろうと思います。学生がロールモデルとなる人に出会うのは、実習の場であることが多いと思います。学生がどんな記録を書いているか、実習指導者がどのようなコメントを返しているか、というやりとりから我々教員が学ぶことがたくさんあると思います。

大島：ありがとうございます。それでは時間がまいりましたが、このもともとの企画者である平塚先生から感想とかコメントをいただけますでしょうか。

平塚：4人の先生方、貴重なお話、ありがとうございました。企画に加わっていてよかったと実感いたしました。いろんな課題が見えてきたんで

すが、その理論と実践、ソーシャルワーカーとうまくリンクさせるための一つヒントとして、鶴田さんと前山さんがいってくださった、もどかしさ、覚悟というものがある。80年代の書物でビル・ジョーダンが『イギリスの福祉』を書いた時に、いつも人間的な側面にずっとそれをもとに実践している、人間的側面は欠かせない。しかし社会的な側面と政治的な側面もあると書いていて、彼はワーカー経験もしているのですが、いくつかの面を持ちながら、やっていることはソーシャルワークをやっていくということなんです。今日のお二人の話を聞いていて、決して理論がないのではなく、実際には(もどかしさや覚悟の中で)ソーシャルワークの大事にしている価値、理論と結びつけて実践されているんだなということが、よく見えたかなと思います。そして実は研究者に求められているのは実践者と研究者がコラボして、ワーカーたちが、もどかしさを感じている、あるところで覚悟を決めたという、ワーカーの内なる言語をしっかりと見える言語にしていって、それを論理的に整理して理論ができれば、ソーシャルワークの専門性、専門職についてはかなり明らかにできるのではないかと考えています。これからの学会に期待したいことはそういうものを可視化していただき、そこを検討すると、昨日の岡本民夫先生の、よその分野にも貢献できるような知的財産を見せることができるのではないかと実感した次第です。そういうことを言語化することで社会の中で悪戦苦闘しているワーカーさんの大きな助けになるのではないかと思います。

大島：それでは高橋先生からまとめのお言葉をお願いします。

高橋：全体をまとめることはできませんけれども、ソーシャルワークマインドということテーマにしてお話をいただきました。現場の方た

ちの苦勞、感じているもどかしさの中核的な問題もあるかなと思います。人への影響、人からの影響、この部分はあまり念頭においてなかったかもしれないなと感じました。実習がらみの調査をした時にそれが利用者であったり、同じ実習生であったり、教員だったり、現場のワーカーだったり、「重要な他者」という概念がありますが、これからの生き方、人生の評価にかかわる影響力をもつ人。カリキュラムとかプログラムをどう、いじるかという話もあるんですが、その部分が重要なかなという気がしました。鶴田さんがうちの大学で話をされる時には、アルバイトばかりやっていた学生だったのが、コロッと変わったのは先生に運転手を頼まれて、その中で現場の人たちがすごくまじめに議論しているのを見て、そこで自分はソーシャルワーカーになろうと思ったとおっしゃっていた。いろんな大変な思いもあったと思いますが、そういう意味で影響を与える人の力は大きいなと改めて感じたところです。

大島：ありがとうございました。今日はお二人の最前線で活躍される実践家の報告を含めて、研究者、教育者がともに議論するシンポジウムができ、実り多い、示唆に富む、今後に向けて議論すべきポイントが見えてきたシンポジウムになったのではないかと思います。今後に向けて、この学会としても、来年度、職能団体のみなさん方とも協力しながら実践家のみなさんにも加わっていただいて、もどかしさを言語化する、共有化していく作業に取り組んでいくことができればと願っています。今日はすばらしい議論を展開していただきました。シンポジストの皆さん方に対して感謝とお礼の拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。これで学会企画のシンポジウムを終了させていただきます。